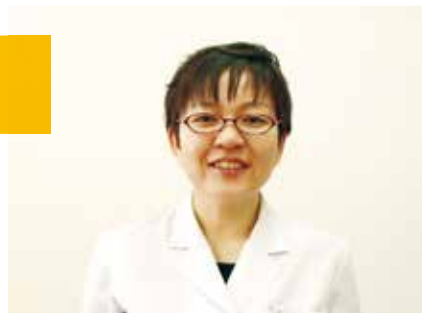


在宅薬剤師『やまね』の訪問日記

第15回

株式会社ファーマシイ 山根 暁子



痛みとその緩和に、ペットの存在がどれほど影響するか——。痛みは、本人にしかわからない。しかし、辛いので適切な治療がある。治療のための痛みの尺度は各種ある。たとえば、医療従事者の間でよく使われるのはNRS (Numerical Rating Scale)。痛みがないときを0、この世で耐えられないと思えるほどの痛みを10としたとき、あなたの痛みは今、いくつか？治療によってその数字がどう変化するか、ひとつの評価基準だ。

*

硬膜外ポートで疼痛を緩和していた、ある患者さんがいた。主治医はとても優しい方で、外来診療の寸暇を惜しんで在宅緩和ケアをされている。その患者さんが自宅に戻ってから2日目、急激に痛みが出て、大急ぎで薬を増量することになった。

「流量制御のポンプを無菌室で調製するので1時間半ください」、「こちらも外来が切れるまで抜けられない。12時半に患家で会いましょう」。到着は私のほうが早かった。患者さんのサイドテーブルを衛生区域に見立て、先生が針を刺せば、薬液が硬膜外に流れるように準備をしながら、患者さんとともに先生を待った。フェイススケールという痛みの尺度があるが、まさにマックスの5 (Hurts worst)。脂汗を流し、歯をくいしばるようにして患者さんが「あと何分(で12時半)?」と言われた。後々どんな問題になってもいい、今すぐ自分で針を刺そうか。迷い始めたとき、先生が転がるようにして到着された。薬液が身体に流れて10分ほどで患者さんの表情は和らぎ、私たちが帰るころには笑顔を見せてくれた。

訪問時にワンワンと吠えていたその家の犬が、帰りには、しきりにすり寄って手をなめてくれた。ケンカの強

そうな面構えの猫も足元にじゃれついてきた。「よくやった」と言われた気がした。その後もいろいろと薬の調節があり、患者さんとご家族が苦痛に陥るたびに駆けつけた。ほぼ毎日訪問したと思う。新しい薬を持って家に入ると、「彼ら」ペットにいつも出迎えられた。こちらが急いでいる場合は近寄ってこない。少し遠くから「その薬で、ご主人は楽になるんだね。しっかり仕事をしろよ」と言われているように思えた。そして「ご主人」の痛みを緩和できて家を出る際は、ペロペロと手をなめて車の前に寝転がってお腹をなでようねだる。ねぎらいの表現に違いなかった。緊迫したときと、ご主人の体調が安定しているときで明らかに表情が変わる「彼ら」。ご主人は、医療者に気を使って痛みを言葉にしたがらない方だったので、フェイススケールと飼っている動物のリラックス度が疼痛緩和、身体状態の指標だった。

*

建前を使わないものからの愛情は心に染みる。イノセンスと智慧は共存しうる。彼らの痛みや生死にかかわる状況認識力は、本能の退化した人間より精度が高いのかもしれない。何かを「飼う」行為を私は選ばないが、イノセンスと暮らすことの喜びについては、この仕事を通じて以前よりも理解できるようになった気がする。

余命宣告を受け、病院でできる治療がないと聞かされた患者さんが在宅療養を選ぶ際、割と高い頻度で「ペットといっしょに生活したいから」と言われる。その言葉の裏にある、非言語の状況であるにもかかわらず生まれた深い信頼関係に、最近ようやく気づいた。病室に入れない「彼ら」は、在宅療養という選択をした生命に本能的な安らぎや希望を与える重要な因子なのだと思う。